

津輕信義制定の

寛永十一年法度「五箇条」について

黒滝十二郎

一、はじめに

幕藩体制下に於いて幕府は大名統制のために、正代の將軍は將軍職就任の時に「武家諸法度」を發布し、全国の諸大名が遵奉すべき津貼を示した。津輕藩では才三代徳孝（それ以前は史料の欠如で不明である）以降、家督相続か又は藩主として江戸から弘前へ初回国の時に「藩士への法度」が出されている。それは幕府の「武家諸法度」の發布とまさに対応していると考える事が出来る。

無論全国の大名も自国の支配のため、その上に幕府法はあるにせよ、藩法といわれるものを制定して一応は独自の支那の体制を依つていたわけであり、津輕藩にも当然云い得ると思われる。

本稿では正代の「藩士への法度」を通じて藩法の一つとしての才三代信義による寛永十一年の五箇条の意義を考察して見たい。

二、正代藩主の「藩士への法度」

才三代信義は才三代の信秋没後寛永八年（一六三一）に十三才で家督を継ぎ、同十年（一六三三）十月江戸よ

リ弘前へ入国した際に御國騒動が起り、藩士向の対立動搖を鎮め藩士への心がまへとしての意味で出されたのが同十一年（一六三四）九月の五箇条の法度である。即ち「寛

一 従公儀段々被仰渡候御定法、弥以、可相守事。
一文武面直の孝向可止掛儀、尤に候事。附、弓馬、太刀、鎗、鉄炮の技芸、習練之事。

一 朋友ハ、信を以て交を要とすべし。少も無礼縁急有るべからず候。況、諸奉行へ対し勿論之事。

一 髪の中ひやう鬘月代のすりやう、衣服、諸道具等、諸人の目に不立様に可仕候事。附、面分の長股差、長がに尻、可有遠慮候。近、手振の中同等召連無用之事。

一 諸奉行諸頭を初め、諸役末々臣役義の筋目を相守、出精可相勤候。惣て面々自分の覚悟を相嗜、奉公油断有るべからず候事。附、好適に仕すべかりざる事。

右之趣、雖も家訓之旧制今般改め申渡候上ハ、家中大小の諸士堅、此旨可相守候。若於違犯者、可為恥辱者也。

戊戌九月 日

土佐

寛永十一年甲戌九月云

石に思われるように、公儀よりの命令を守る事（才一
条）文武の奨励（才二条）礼義を重んずる事（才三条）
儉約（才四条）前言を守りて自分の仕事に励む事（才五
条）等である。

才四代信政以後歴代の藩主は家督相続の直後か品前へ
加入国の直後に法度を出しているのに対し、信義は八國
役約一年を経過してから右の五箇条を出しているのは、
これまで津輕藩の体制が整備されていなかったのである。
世に云うならば、抽象的な内容を持つ此の
五箇条の法度の制定こそ藩体制整備への才一段階とも云
い得るのである。

信義の後才四代信政は明暦二年（一六五六）十一才で
家督を継ぎ、寛文元年（一六六一）六月三日に入国し六
月二十一日に十一箇条の法度が出された。即ち

「諸法度

一 不論貴賤父母兄弟孝友之輩及節婦等於有之者郡奉行
町奉行并目付方より見及聞及次才に危度可申上事勿
論不孝不弟之輩有之者可申上事

一 百石士之嫡子二百石以上之子弟拾一歳より馬弓諸禮

讀書之習熟拾六才より以上者學向義理之讀習武藝
古問新不仕候之様に又元可致教戒事

一 自今以後非番在國之士不嗜弓馬肆耽酒色之輩若實
否可處罪科事

一 訴訟之儀有之者八頭を以申上頭無之者におゐて
は親類縁者之内一両輩召連奉行所江可罷出事若徒黨
を立陣諍状あるてハ旅難為道理堅立向鋪事

一 衣服之事百石より以上向後細綿木綿可着之百石より
以下者可為木綿此外堅帯止之惣而下々之者ハ半ズリ
帶等に至區木綿之外可為兼用事

一 振舞之隱木具并至整停止之ニ汁五杯有ニ種
酒三献不可過之事惣而珍客嫁娶之節たるといハ共饗
疵輕く可致之事

一 音信贈答之品重物可為無用渡者等に至區可為輕少事
一 嫁娶之儀直年甚及美儀自今以後諸道具以下分に盡た
る結構不致可用候約事

一 羈旅行人ハ加憐恤一切不可有慢事若於致病死者檢使
を差遣之旨可相觸事

一 土民町人五人組を立向後萬事可申合事
一 分内之量衡一國之通用無私曲可申付事

右條々堅可相守者也

寛文元年六月廿一日

續いて翌年三月に十七箇条の家訓が出された。⁽³⁾ 即ち
「家訓條々

一 従御公儀所被仰出之条々堅守其旨違背仕間敷候

一 者頭抱奉行之輩私をかまへ最賈偏頗之儀為曲之事

一 家職之儀常々無油断可相勤附武具人種等其分限に隨

ひ可相喧事附刀服差衣類等諸人之目に懸さる様に可

令寛信事

一 手賣たるものかくし置向鋪候惣而他所之者におゐて

はたとひ親類縁者たりといふ共家老共に断なくして

一 宿もいたせまじき事

一 喧嘩口論落書張文堅制禁之事若屋鋪中に喧嘩有之に

おゐては当番之面々ハ其所を守りかけ集るへからず

番方かき所に至ては其輩可斗之勿論荷擔せしめは可

為重科事

一 屋鋪中に若火事之出来は早速其所へかけあつたり打

消へき事

一 供之時分は不及申直あるき候時惣して人に行当り候

ハぬ様に可仕候并供替之刻又者使等に罷越候節直寄

仕ましく候旨恭無撥用所有之ハ其輩之頭江相勤可仕

至因事附供之先にて他之者と入まじり罷在まじき事

一 御一四方者不及申御入魂之蒙江不禮仕向鋪候馬上に

る者何方にて懸御目候共下馬仕へき事

一 面々内之者町等にて云事いたすにおゐては遂穿鑿品

により当人は不及申主人迄も曲事可申付事

一 其身は勿論召仕之者迄も人請に立へからざる事

一 就大小事立徒輩輩可為罪科事附傍輩之中有子細而家

中を立退時分或曰求入魂之やから或縁者親類等其者
に荷擔いたし無子細立退輩は可為正心之罪科事

一 諸傍輩之中申妨儀仕向鋪事附無由通して他家之者と

寄合申向鋪事

一 博奕令停止詔書^{（イ）}承^{（ロ）}敷等に至迄かけ勝負仕向鋪候附傍

輩に對し由緒なくして過分之振舞いたし乱舞遊樂を

催し或大勢之寄合不可有之事

一 風呂屋傾城町等江參向鋪候并若家直之儀堅為停止之

条其間之使をも仕まじき事

一 縁切之儀以私究へからずむ嫁娶之儀式不可致美々錦

事

一 跡職之儀養子ハ前方可相究実子ハ前方相統之御禮可

令致之及末期不届遺言有之ハ隨其品可有用捨事

一 門之出入程に不可致之勿論幕外に出入不可仕之若

無撥儀有之而人ないにすにおゐてハ家老共に子細を

可相断事

亥三月日

右に見られるように、信義時代の五箇条と比較すると

一段と詳細になり藩士の日常の行動の各方面にわたつて

規制している、これらは同時に幕府法である寛永十二年

（一六三五）十二月十二日に出示された諸士法度二十三箇

条を参照して作成されたものであり、藩政確立への基礎

となつたのである。^{（イ）}
信政は宝永七年（一七一〇）十月弘前城内で六十五才

の生涯を終えるが、彼の治政約五十年は信義時代迄の藩政を以て、寛文延宝期をもつて藩政が確立し更に諸制策が完備して行つた時代である。しかし全国的に見ると幕藩体制の確立期から幕府の財政窮乏が始まる時期にあつてゐる。

才五代信寿は宝永七年（一七一〇）十二月に四十一才で家督を継ぎ、翌年の正徳元年（一七一一年四月に改元）八月江戸に於て十二箇条の法度を出している。

「一先生於御回御家中一統＝本綿着用仕候得共其以後三石以上絹布着用之義勝手次第着用仕之旨被仰出之候先達而紗綾綸子縮緬之類者千石以上六十以上より着用可仕旨被仰出候然則近年追日諸事苛酷＝仕刺小身之侍茂紗綾縮緬着用仕候向後紗綾縮緬之類於御回八十石以上御側用人以上之外者堅停止（以下略）

一近年御家中之婚礼不能分限結構＝相聞候向後取加ハし等輕可仕候衣類之類ハ前＝記候通り従羽二重以下夫々之分限より輕々可仕候器物之類者愚達を用薛參之類堅不可用候料理之儀二汁五菜不可過候勿論嶋臺本具等之類堅停止之其外之祝儀事出合之節料理輕く

二汁三菜＝不可過事

⑩御家中之居宅分限を越結構＝仕候向後勝手成續候ものたりといふと改面々之分限相庇より輕く可仕候御役儀＝付輕く難成面々ハ御家老江相窺可仕差圖ニ之事

⑪御家中之諸士武具馬具等之儀其分限＝隨ひ相喧可申

事

附武具馬具等申付候面々儀只今迄者好結構を候故小道具迄相前仕立候事不成輩有之様相聞得向後結構を相止利方を考小道具等迄相揃候様＝隨可申事」右のように衣食住の儉約と武芸等の儉約と奨励が知られるのである。

ちようどこの時期は幕府の財政窮乏が表面化して通貨を悪化・増殖する悪循環が見られ、才五代將軍綱吉の死去から家宣が才六代將軍となり、元禄期の施政の欠陥を修正改善する転換期である。

津輕藩に於いても信政の善政にもかかわらず、元禄八年（一六九五）の大飢饉以後次第に財政が苦しくなつてゐる事が知られるのであるから、正徳元年の法度は右の事情を背景にして家督の相続後江戸に於いて出されたものと想われる。

その後十九年を經過して信寿が六十一才の時、即ち享保十五年（一七三〇）九月十五日に弘前城で五箇条の法度が出されてゐる。それを左に掲げると、

「一

一従公儀段々被仰出候御定法疎以可相守事

一文武両道之字向可此懸儀尤＝候事

附弓馬太刀鎗鉄炮之技芸習練之事

一朋友ハ信を以亭支を要堂寿遍し少々無礼儀急有へか

り寄候況頭奉行江対し勿論之事

一 髪のゆひやう髪月代の弄りやう衣服道具等諸人の
回に不立様＝可仕候事

附過分之長駄差長方可有遠慮候并手振之中御等召

連用之事

一 諸奉行諸頭等始諸役末々迄役儀の筋目を相守出精可
相勤候抱而面々自分之覚悟を相暗事公御有直から
寄候事

村野酒に下すへからざる事

右之趣ハ雖為家訓之旧制今歳改の申渡候上者家中大
小之諸士堅此旨を可相守之若於令宣及者可為馳馬者

也

戊戌月 日

土佐

古御書付享保十五年戊戌九月十五日被仰出之

し

この法度は前述の才三代信義が出した寛永十一年のもの
と全く同じ内容のものである。享保十五年九月十五日
は信義が江戸へ出立する四日前である。この頃の参勤支
度は隔年毎に普通三月中旬に弘前を出発し、四月上旬に
江戸へ到着している（翌年四月下旬江戸参、五月中旬弘
前参）。従って享保十四年は江戸へ滞在しているのであ
るから翌十五年は弘前在国のはずである。

それにもかかわらず、九月十九日江戸に向つて弘前を
出発したのは特別の理由があったものと考へねばならな

い。現在最も史料的价值の高い『藩日記』（弘前城中の
記録である『御面日記』及び江戸上屋敷の記録である『
江戸日記』を含む）は日記役による公的史料であるため、
信弄の弘前出立を裏づける根本的理由は記されていない
のである。信弄が健康体である長男の信興に家督を譲る
のであるより、特に九月十九日に出立する必要もある
まい。信弄にして見れば孫の信若（信興の長男）に相
続を危がざるを得ない可能性が大きいために、信興が享
保十五年八月一日に越中守に任ぜられた事を祝うとい
う形で、実際は信興の病状を自分で確認するのが重慮で九
月十九日に江戸へ向かつたものと思つのである。

信若へ相続を危がざるを得ない可能性といふのは、江
戸に於ける信弄の九月に入つてからの様子や次の史料に
よつて見ると、九月一日には、

「一若殿様少々御風氣ニ付御保養今朝登城不被置候（以
下略）」

九月六日には、

「一若殿様少々御不快被成御座去朝日御漸被仰上御登城
不被置候段々御快然付而今日御用番松平伊豆守様杉
正左近將監様江井藤次郎守様江被遣御出候」（以下略）

九月十五日には、

「一若殿様今日御登城不被置候付帶刀并御用人御部屋不
置出候」（以下略）

と見え、風邪のような身体状況がうかがえる。

しかし、十月には登城しており、特に身体工合が悪いという記事は「江戸日記」からはうかがえないけれども、信壽は実は単なる風邪程度では無く以前から肺結核等の如き内科的疾患で風邪のような症状が慢性化して、身体工合が良くなかったのではないかと考えるのは推測しすぎるであらうか。(「江戸日記」にもありわけない)更に信壽の様子は弘前城にいる父信壽へひそかに伝えられてゐるからこそ、大急ぎで孫の信著に家督を譲つて津輕藩の安泰を計るゝとして、

「九月十九日 屋形様江戸へ御登駕此度御出府にて被
並御座居候ニ付去ル十七日於御城一役参入江御普付
御濃被差候

(次に前述の五箇条が見られるのが省略)⁽¹⁾
と見えるように信壽は江戸に向かつて弘前城を出発した
のではなからうか。その間に藩士の動搖が起らない様出
発直前の十五日に、家臣として守るべき心がすへを再確
認する意味で五箇条の法度が出されたものと想うのであ
る。

よがて、享保十五年十一月二十五日、以前からの身体
工合の悪さに当時大流行した麻疹(はしか)のため、⁽²⁾
いに信壽が江戸に於いて三十七才の若さで死亡し、翌十
六年(一七三一)五月十六日信壽は隠居して孫信著が十
三才で無事才六代藩主として家督を継いだのである。又
同年十二月著が(信壽の子であり信著の叔父)が舍牙と

して幕府から認められている。信壽が隠居したのは、津
輕藩の存続を確固とするために孫への相続を怠いたもの
にはかならない。

かくて信著が藩主として元文元年(一七三六)初めて
入国し(この時、信壽はまだ健在である)、その後延享
元年(一七四四)五月弘前城で急逝するが、⁽³⁾また二十六
才であり治政わずか十三年である。

右の事情を考慮すると、信著が家督を相続した時、又
初めて入国した時にも藩士に対する法度は出されなか
つた理由が、実態として信壽時代の継続であるからと思わ
れる。

従つて信義の寛永十一年から九十六年後の享保十五年
に同じ内容の法度が信壽によりて津輕藩の家督相続をめ
ぐる一大転換期に出されたという事は、信壽が五箇条の
法度を藩体制維持の目的の基本法の一つとして強く意識
していた事にほかならない。同時に津輕藩に於ける基本
法の一つとして大きな意義を持ち、又大きな影響を与え
たものと思ふのである。尚この事について次項「三」で
再びふれるつもりである。

信著の後は延享元年八月に信寧が才七代藩主として相
続する。またわずかに五才である。(この時曾祖父信義
は七十五才の高齢に達し、まもなく延享三年に死亡する)
その時の九月二十一日に文武の緩急を戒めて江戸で出さ
れた御觸は次の様なものである。⁽⁴⁾

「御家中之面々近年文武止掛後也に相聞得候。此以後無
油斷、文等兵等ハ勿論、弓馬、刀槍之技芸、隨分修行
可有之奈、修練拔群之族ハ末々格別御沙汰可有之候。

右之區可被相心得候

工藤家記し

その後宝曆六年（一七五六）五月九月、十七才にして
初めて弘前城に入り、六月十日に御定法及び御家法を全
部編纂するように命じている。（前）

信等の時代（延享元年（一七四四）—天明四年（一八二四））は
全国的に見ると田沼時代にあたりているが、田沼寛次の
悪政と非難される諸現象の先駆は、すでに才八代吉京の
享保改革に於いて見られるのであり、その後を受けつい
で明神田沼時代には天受等が起り、農村が衰弊し幕府が
全般的衰微をむかえる時期である。

その間、津輕藩に於いても洪水、風水害、地震、飢饉
（特に天明の大飢饉）等で藩政が窮乏し、乳井貢によ
る宝暦の改革（宝暦三—八年）が更られるものの、藩体
制の動搖が如実に示される時期である。

信等の御定法及御家法を全部編纂するという事は、宝
暦改革に於ける法の整備を意味するもので、藩体制の弛
緩、動搖を防ごうとする諸政策の一環として重要な意味
を持つものと思われる。（御定法と御家法については次
項「三」で再び述べるのもりである）

右のような点から考えて、信等の時代を境として才八
代信明以降才十二代承昭までは、家督相続後が初八回の

時に出されるものは、これまで見て来た所謂「藩士への
法度」とは全く性格を異にするように思われる。

それは御自筆、御染筆などの名称で表われるのである。
信明は天明四年（一七八四）二月三十日に二十三才で家
督を相続するが、三月に出された御自筆は次のようなも
のである。（前）

「天明四年三月、公、御自筆を以被仰出候御書付、左＝
其方共儀、蒙御厚恩殊＝戒香院殿（信等公）御厚恩
夫々役義被仰付置、銘々忠勤相励置在候。此度某事御
遺跡相統致し、殊に若年諸事不馴にて戒香院殿御命令
をも失ひ先祖をも汚す事も可有之哉と、甚不安心＝候。
銘々先祖戒香院殿之御厚恩を存、其方共之先祖之忠勤
致候運、弥、日夜心を尽し、忠節不怠相勤可申候前々
追々可申付候事。

辰三月

其方共存之運、某事若年諸事不馴にて有之候へば、
向宣之前可有之哉不安塔に存候。此上隨分銘々心を尽
し、先祖、代々戒香院殿之被安置候御政向、少しも失
不申向宣之筋無之様、大切に取扱人民難儀無之様、政
道向を正敷取扱可申事。（以下略）

これは要するに「忠節を怠らず、一生懸命勤めよ」と
云う事で、省略部分の七箇条も大体同じ事を云っている。
才十代信順の場合を例にとつて見ると、彼は文政八年
（一八二五）四月十日、二十五才で家督を相続する。同

年四月十六日次のよう方御茶番が出されている。(註)

「侍従様(寧親公)、被為及御老年候ニ付、御陰居御願、
某へ家督御譲ニ候。侍従様御事ハ、御先祖様御政務ヲ
御守、多年被為之尽御心被行御仁政候之処より、家格
ニ無之、御官位並高増等、而度迄被為蒙仰、殊ニ某モ
結構蒙仰候様、偏ニ侍従様御勤力ニ寄候事、莫大ニ御
規模重疊難有事ニ候。某事不馴ニ付候得共、万事御先
相様、侍従様被取置候御政務之通、相守候心得ニ候。
何れモ是迄モ忠誠相励候得共、尚申合果由祈茲精勵可
有之候。

右に見られるように、これ又「一主選命に對めよ」と云
う事である。

かくて信明(才八代)寧親(才九代)信順(才十代)
順承(才十一代)武昭(才十二代)と受け継がれ、御自
望が御染筆という形で出されているのがわかる。

そうするならば、信寧の時代に御定法及び御家法の全
部を續康するという事は、津輕藩に於ける藩士への法度
を考察する上にすでにふれに様に大きなポイントの一つ
になると思われるのである。

註① 『津輕歴代記類』(あちのく双書)24頁。これ

には出典が見えないので、上記の本の原本と思
われる明治十五年頃に完成したという国立史料
館蔵のものをみるとやはり出典がない。更に古

い明治十年に寸とまったという『津輕旧記類』
才四号(国立史料館蔵)の寛永十一正のところに
にはこの法令すらも見えない。弘前図書館蔵
の『津輕旧記類』の草稿等を調査しても見当ら
ない。従つて『津輕歴代記類』上24頁の出典は
不明であるが、信賴度の高い好文献と認められ
ているものであり、これを否定する史料が今の
ところなく、今後も調査して見たいと思つてい
る。尚、拙稿『津輕藩「御定書」の成立とその
意義』(『弘大回史研究』才60号)をも参照さ
れたい。

註② 国立史料館蔵『津輕家文書』

註③ 同右 (一)は筆者による。

註④ 蝦名庸一氏「津輕信政時代における法令の整備」
(『弘大回史研究』才23号)

註⑤ 拙稿前掲論文

註⑥ 『落日記』(『御国日記』)才七三六 正徳元
年八月廿六日(弘前図書館蔵)

尚書等は便宜上、筆者が十二回茶につけてもの
である。その他の諸条も衣食住等に關したもので
あるため省略した。

註⑦ 『落日記』(『御国日記』)才一二三八 享保十

五年九月十五日
その他『御用格』(寛政本)才五、『要記抄』

『才十二』、『津輕編覽日記』卷五、『御定法編年録』、『御定法古格』上（以上弘前図書館蔵）にも見える。

注(3) 『津輕正代記類』上 四頁

注(4) (1) 『藩日記』(『江古日記』) 才五五。

注(5) 『津輕編覽日記』卷五、享保十五年九月十九日

注(6) 『永禄日記』(みちのく双書才一案) 四頁

注(7) 『津輕藩日記類』(みちのく双書才三集) 四頁

注(8) 『津輕藩日記類』上 206頁

注(9) 『津輕藩日記類』上 206頁 『津輕編覽日記』

注(10) 『津輕藩日記類』上 206頁、これには八月二十一日

とあり、その出典は『討内事実秘苑』

に『弘前圖書院蔵』で九月二十一日とあり、九月

二十一日が正しい。

注(11) 『津輕正代記類』上 四頁。この出典は「佐藤家

記」であるが、現在所有者不明のため、ここに

記載されている事以外はおかしい。尚、津輕

藩日記とては八月となっているが同じ内

容のもので、前者より詳細に書かれている。そ

の点については次項「三」で記述したい。

注(12) 御自筆も御受筆も言葉の違いはあるが、内容は

同じと考えられる。

注(13) 『津輕正代記類』上 244頁
注(14) 同右 下の頁

三、津輕信義制定の

寛永十一年法展五箇条について

これまで正代藩主による「藩士への法度」の考察を通じて信義による寛永十一年の五箇条と、信義による享保十五年の五箇条の関係を述べて来たが、寛永十一年の五箇条は後世の信義によりて基本法として取扱われており、その五箇条は単に法的整備が進んでいない段階のものと見なされたいものである事が判明した。

更にその後信義の宝暦六年にこれに制定され、法度を編集して統一をはかろうとしたが、その時寛永十一年の法度はどの様に取扱われ、以後正代藩主によってどの様に取扱われたかを考察して見たい。それは又、その五箇条の法度の意義を追求する上に重要であると思うからである。

最初に前項で触れた様に才七代信義が御定法及び御家法の全部を編集するといふ事は、

「同八日御旧政新御編纂被仰付候ニ付御書付左之趣

従古来御代々被仰付座候御定法共数条有之從心院

様(才四代信義)御代江戸上方御回元御家法之節漸

相立候得共年々月々時々之沙汰ニ寄致ハ其事ニ從而

其儀一式之申而召接々違々被仰出候向只今ニ至リ其役々間々ニ粗旧記ニ載リ致混雜ヘシ中略……今度思召被指上御家法悉一統ニ被成一切之事業品物之制度可相立被仰出候向古承中興被仰出候御定書付共ニ全編集被仰付出家後悉御家中町在江被見被仰付可被差置候向役々所ヘ門々ハ不申及銘々家々に相傳候御定書付所持之者ハ何儀ニ不寄無置慮不殘如何様之誓物成共来月晦日迄可被差出候三之九於御座敷取扱役人被差置候向可承合候 以上

子六月

(以下略)

L1

右の御定記ニ在点からうかがえる様に、才三代信義以前のもが「御定法」であり、才四代信政以後のもが「御家法」と思われる。これを更に裏付けけるものとして、才八代信明が家督相続後の天明四年(一七八四)四月三日の日付で

「同日御家訓御書付一通御濱被成候御定法并御家訓共ニ御先祖御用被置候向各相心得候様被仰渡候と見える。」

才九代寧親は寛政三年(一七九一)八月二十八日に家督を継ぎ御自筆を出す。同年九月十三日の日付で、

「今日一役重人江御家老中相渡候御書付左々通

申渡之旨

御意被成候者當

御代御仕置之儀萬事

御代々々通被仰出候向御家中之面々兼而之御定法之趣急度相守申候依之御家訓之儀茂御先祖規被盡 御用候向各可被相心得候事

亥九月

御家老

(以下略)

L4

と見える。

その他に列挙する所ならば、才十代信順は文政八年(一八二五)四月十日に家督を継いで、四月十六日に御染筆を出し、四月二十三日の日付で、右の史料とほぼ同じ内容のものを、才十一代順承は天保十年(一八三九)五月十三日に家督を継いで、八月七日に御染筆を出し、同七日の日付でほぼ同内容のものを、才十二代永昭は安政六年(一八五九)二月七日に家督を継いで、五月十三日に入嗣し十八日に御自筆を出し、同十八日の日付でこれ又同内容のものを述べており、まさに形式化して来ているのがわかる。

以上の事から具体的に信義以前の「御定法」は何を指すかと云えば、現存する史料として寛永十一年(一六三四)の五箇条と思われる。そこで「藩士への法度」にのいて、「御定法」が基本法であり、信政以降の「御家訓」(「御家法」と同じ意味で使用されていると思われる)が施行法であると思ふのである。

それでは基本法と施行法との兩者を具体的に述べて見

る事にする。

寛永十一年の五箇条を更に具体化したものは、信政による寛文元年（一六六一）の十一箇条と翌二年の十七箇条である事は前に述べた通りであり、施行法として年代約にも内容的にも確実に言い得るものである。重複するので省略し、⁽⁹⁾その他にいくつかの例をあげて見たい。

寛永十一年の法度才二、三条

「一文武面直の字向可仕掛儀、尤に候事。附、弓馬、太刀、鎧、鉄炮の技芸、習練之事。」

「朋友ハ、信を以て文を辱とすべし。少も無礼緩急有るべからず候。況や、驍軍行へ対し勿論之事。」

これに對し、信政の寛宝六年（一六七八）十一月武芸之儀に付御渡書付には

「一家中の諸士大小上下に不限、武芸之儀、殊に可相勤候、依之為稽古、山川野辺は羅越儀常番公用之外、

毎日なり共此才罷出候可仕事（才ニ条以下略）」

に始まり五箇条累られる。又享永三年（一七〇六）十二月二十一日の武芸を奨励し使役を命じた五箇条の才一条に、

「御家中諸士前々被仰出候通弓馬武芸之儀殊に無間斷相曉能義才一に相身之朋友之寄合にも武士道正義之穿鑿事と可仕候事」

（才ニ条以下省略）

（9）

と見える。このように規定は幕府法でも「武家諸法度」

の才一条に見えるものであり、津輕藩に於いても数「藩日記」等に見える、藩体制の維持強化の為に武士にその本分を尽させようとしたものに外ならない。

次に寛永十一年の法度才四条の

「一髪のゆひよう鬘月代のすりぐら、衣服、諸道具等、諸人の目に不立様に可仕候事。附、道分の長短差、長かに取、可有虚慮候、並、手振の中同等召連無用之事」

これに對し、才五代信寿による正徳元年（一七一一）の十二箇条が見られ、すでに「二」の項で述べたが、才一条と才十一條があげられる。又、享保九年（一七二四）十月十五日の鹽素儉約についての十三箇条⁽¹⁰⁾、明和五（一七六八）三月九日の儉約令十四箇条⁽¹¹⁾、文化八年（一八一）九月一日の番服儉約についての十三箇条⁽¹²⁾、その他「藩日記」等に見られ長きにわたるものである。

明和五年を例にとれば、

才六条

「一御家中衣類者大身にりともし統綿服着用羽織袴等或應分着服相用可申事」

才七条

「一御家中妻子之衣類茂至百石以下褲服相用可申候五百石以上袴綿服勝手才應分着服を相用可申事」

才十三条

「一大目付以下五百石以下年始之外平生縫着持候儀有矣」

用事（以下略）

才十四条

「一物頭以下三石石以上たり共平生若輩不及百匁に右

以下輕者に至まで者無儀可爲勝手次第事し

右のように質素倭約令が出されるのは、津輕藩にとって元禄年間以降に財政窮乏が才に顕著になりつつあるのに対しての規制と應われる。

最後に寛永十一年の法令才五条

「一諸奉行諸頭を初め、諸役末々迄役裁の前目を相守、

出精可相勤候。惣て面々自分の覚悟を相暗、奉公油

断有るべかりず候事。附、好酒いたすべからざる事」

これに対し、元禄十年（一七九七）六月に出された藩士

への訓令八箇条がある。^⑦その才一条、才二条に

「一忠義之危深切に有之上ハ一節ニ御爲を奉在分々之忠

節ヲ可相勤儀本意に倣之處御奉公之勤ハ表向迄ニ成

候而一分之立身私欲之格勤有之段ハ至而口惜心底と

相見得候事。

一実儀之勤に候者武之本意を達して其職役を怠度可被

相勤儀肝要ニ候事」

と見える。これは藩士の執務態度についての怠情を戒め

たものの一部であるが、前者才五条を基礎としているも

のである。これも又財政窮乏等に伴う支配体制の緩みを

厳しく規制したものであろう。この他に寛文元年（一六

八四）同二年等多数見られるところである。

四、むすびにかえて

以上述べた事から、才三代信義による寛永十一年の法度
は才五代信寿の享保十五年にも出された。それは家督
を継ぐべき信興が病弱であり（やがて死亡する）、信壽が
り孫の信著へ相続させるといふ津輕家正代に於いて例を
見ない相続をめぐる一大転換期であるという事情による
のである。その点からも寛永十一年の法度は基本法とし
て意識されていた事を知り得る。更に才七代信寧によつ
て意識されていた事の再編集が見られるが、その時にも信義
による寛永十一年の法度は、「古来よりの御定法」即ち
基本法として意識されていた事を知る事が出来る。又才
八代以降の藩主は相続する時に「御定法」「御家訓」と
いう表現で法令を区別して使用している事が、信義
時代の寛永十一年の法度は津輕藩政時代に於ける基本法
であると言い得るのである。同時代に才四代信政以後多
数の施行法が出され、藩体制の維持のために法的規制と
して作用している事がわかるが、これらの法令もやはり
寛永十一年の法令を基礎としているということである。

このように見ると寛永十一年の法度は五箇条にす
ぎないが津輕藩政上はなほに大きな意義を有するものと
思われるのである。

注① 『津輕編覽日記』巻七 宝暦六年六月八日

青森県の歴史散歩

橋本正信

本書は、全四十七巻からなる「歴史散歩シリーズ」の2として出版された。執筆者は、現在本県の高校に勤務し、研究、実践面で活躍している方ばかりである。荒井清明、稲葉克夫、蝦名庸一、大川哲夫、尾本正史、角田詮二郎、加藤邦夫、小笠原三、佐藤仁、高田安雄、高橋正雄、藤田本太郎、森山泰太郎、米谷直の各氏がその一である。歴史学の分野から民俗学、地理学、専攻の諸氏も名を連ねておるのは、本書が歴史散歩と称し、「横の歴史」を重視していることを意味する。先に出版された宮崎道生著「青森県の歴史」が「縦の歴史」を系統的、学問的に究明したものとすれば、本書は、「横の歴史」を断片的、タイジェスト的に紹介したものと見える。以下、本書の特徴を二、三あげ、若干の希望を述べてみたい。

- (一)とその中の文字、及び。印は筆者が附した。
- 注(2) 同右書卷十一、天明四年四月三日。印は筆者。
- 注(3) 『津軽近代記類』下 2頁
- 注(4) 『藩日記』(『御国日記』)才二三一五、寛政三年九月十三日。印は筆者による。
- 注(5) 『津軽近代記類』下 89頁
- 注(6) 『藩日記』(『御国日記』)才二七五一、文政八年四月二十三日
- 注(7) 『津軽近代記類』下 15、16頁
- 注(8) 『藩日記』(『御国日記』)才二九八一、天保十年八月七日
- 注(9) 『津軽近代記類』下 18頁
- 注(10) 『藩日記』(『御国日記』)才三二二八、安政六年五月十八日
- 注(11) 「二」の項参照
- 注(12) 『津軽信政公事録』19頁
- 注(13) 『藩日記』(『御国日記』)才六二二、宝永三年十二月二十一日
- 注(14) 同右書 才一の八三、享保九年十月十五日
- 注(15) 同右書 才二〇二三、明和五年三月九日
- 注(16) 同右書 才二五七〇、文化八年九月一日
- 注(17) 同右書 才三四一、元禄十年六月二十六日(は筆者)
- 注(18) 『津軽信政公事録』28、29頁

(昭和四十八年三月二十日稿)